

倒産件数予測【予測結果】 - 2026年Q3・2026年Q4 -

伊藤海翔※1 出雲滉己※1 大里隆也※2

※1：滋賀大学データサイエンス研究科

※2：滋賀大学データサイエンスAIイノベーション研究推進センター



滋賀大学



帝国データバンク

Data Engineering and Machine Learning Center

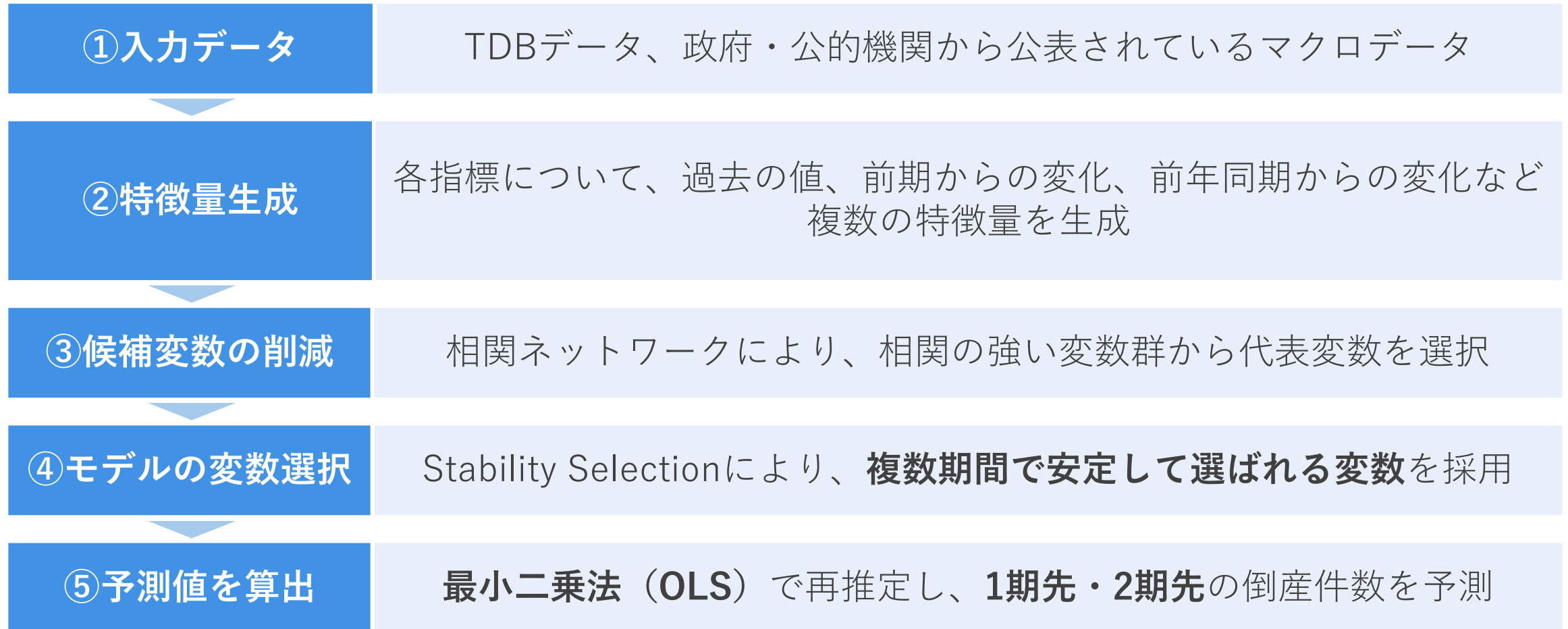
TDB × SHIGA-U. DEMLcenter©

本レポートの目的と背景

- 目的
 - 2四半期先までの業種別倒産件数を高精度に予測し、倒産動向から経済状況を可視化すること
- 背景
 - －原料価格の高騰や海外リスク、円安等により経済状況が変化していくため、**倒産件数の動向を継続的に把握する必要がある**
 - －経済状況が倒産動向に与える影響は業種ごとに異なるため、**業種別の予測が必要**である
 - －各要因が倒産件数に与える影響を把握するため、**予測精度だけでなくモデルの解釈性も重視する必要がある**

予測手法の全体像 詳細は倒産件数予測（モデル概要）に記載

多数の説明変数候補から安定した変数を選択し、解釈可能な回帰モデルで倒産件数を予測



業種別倒産件数の推移

- 全体として直近の倒産件数はおおむね安定して推移
- サービス業と建設業では、**コロナ禍前の水準を上回る水準**、卸売業・小売業・製造業は**コロナ禍前と比べて同程度または低水準で推移**

業種別倒産件数の動向（2007Q1～2026Q2）^[1]



[1] シャドー部分は景気後退局面（内閣府調べ）

倒産件数の予測結果の見方

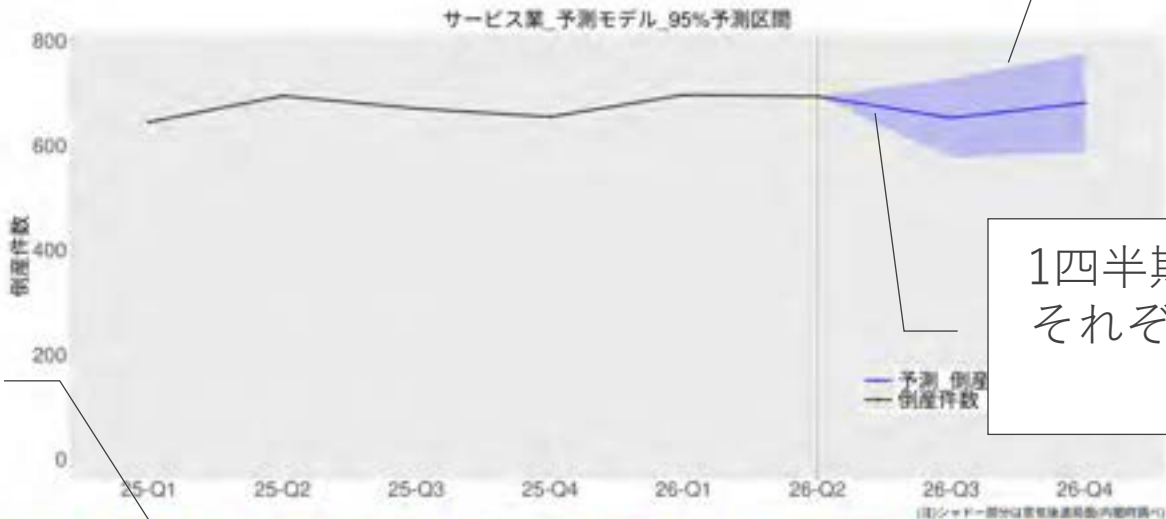
【〇〇業】倒産件数の予測結果

・ 今後2四半期は、**現在と同水準で推移**することが予測される

青色の帯は95%予測区間を示す

予測結果の解釈

95%予測区間の上限・下限



1四半期先・2四半期先の予測値は、それぞれ対応する予測モデルによる結果を示している

	25-Q3実績	25-Q4実績	26-Q1実績	26-Q2実績	26-Q3予測	26-Q4予測
予測区間上限	—	—	—	—	727.49	774.70
実績・予測	670	654	696	693	652.10	680.35
予測区間下限	—	—	—	—	576.70	586.01

予測モデルの要因分解の見方

【〇〇業】 1期先予測モデルの要因分解

回帰係数 × 標準化後の実測値により
各変数の予測値への寄与度を算出^[1]

1四半期先予測モデルの予測値
の要因分解を示している

正方向の寄与は予測値を押し上げ、
負方向の寄与は押し下げる

各変数の寄与度の正負は、
回帰係数の符号と標準化後の値
の組み合わせで決定

- 1四半期先予測モデルの予測値の要因分解を示している
- 予測値への寄与には**短期借入合計金額**に関連する指標が強く反映されている

選択された変数
からの考察概要^[2]

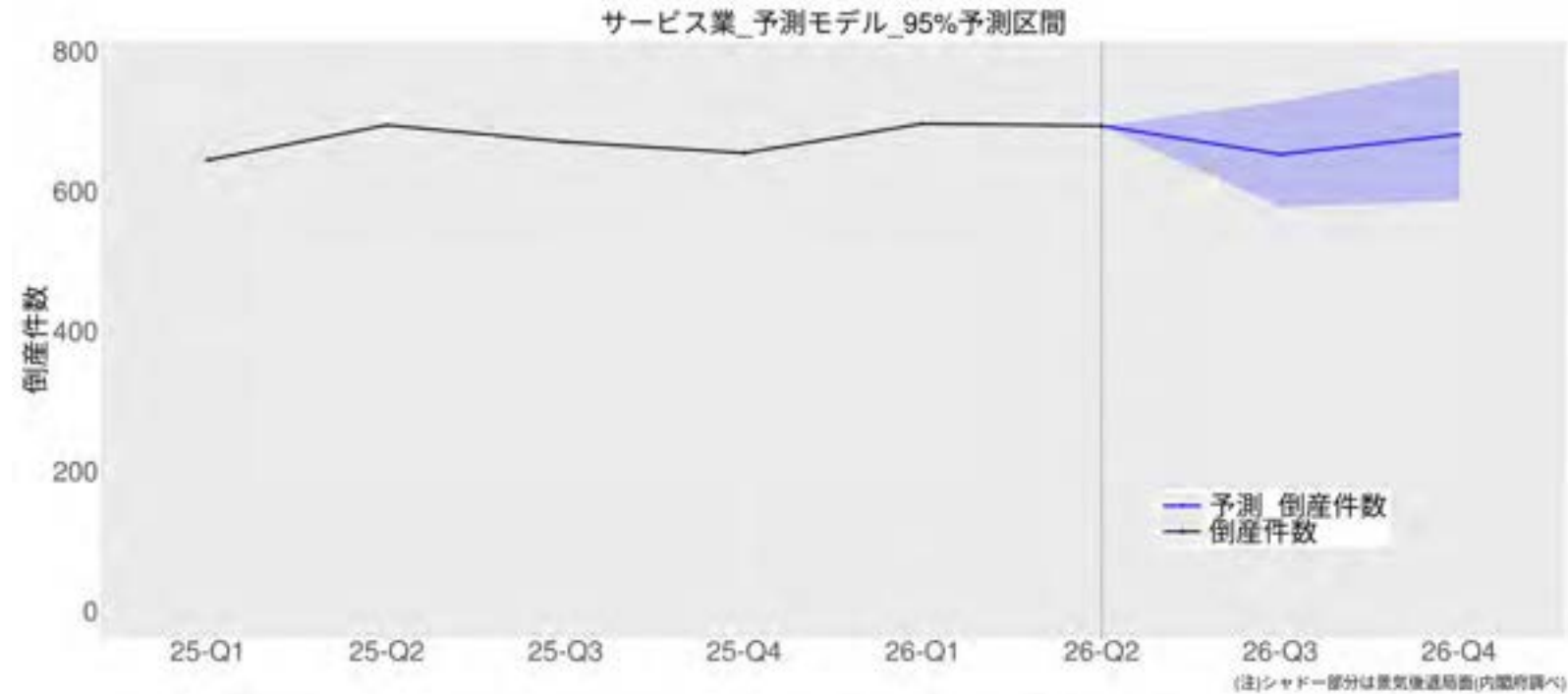
結果の解釈

[1] ここで示す解釈は、予測モデル上の変数間の関連および予測値への寄与に基づくものであり、統計的に有意な因果関係を示すものではない。

[2] 貿易統計の主成分変数に関しては各変数の解釈をP.19 [参考]に記載

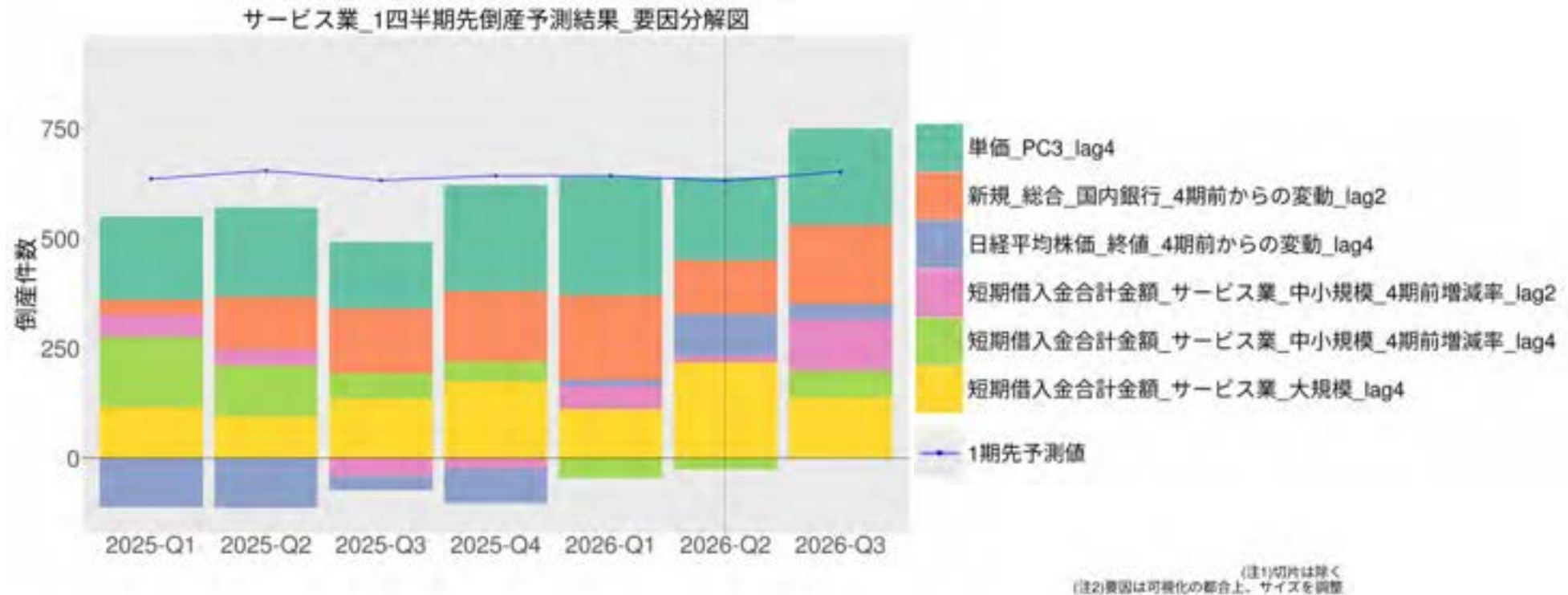
【サービス業】倒産件数の予測結果

- 今後2四半期の倒産件数は、**現在と同水準で推移**することが予測される
- 2026年Q3に一度減少した後、2026年Q4にはやや持ち直す見込みである



	25-Q3実績	25-Q4実績	26-Q1実績	26-Q2実績	26-Q3予測	26-Q4予測
予測区間上限	—	—	—	—	727.49	774.70
実績・予測	670	654	696	693	652.10	680.35
予測区間下限	—	—	—	—	576.70	586.01

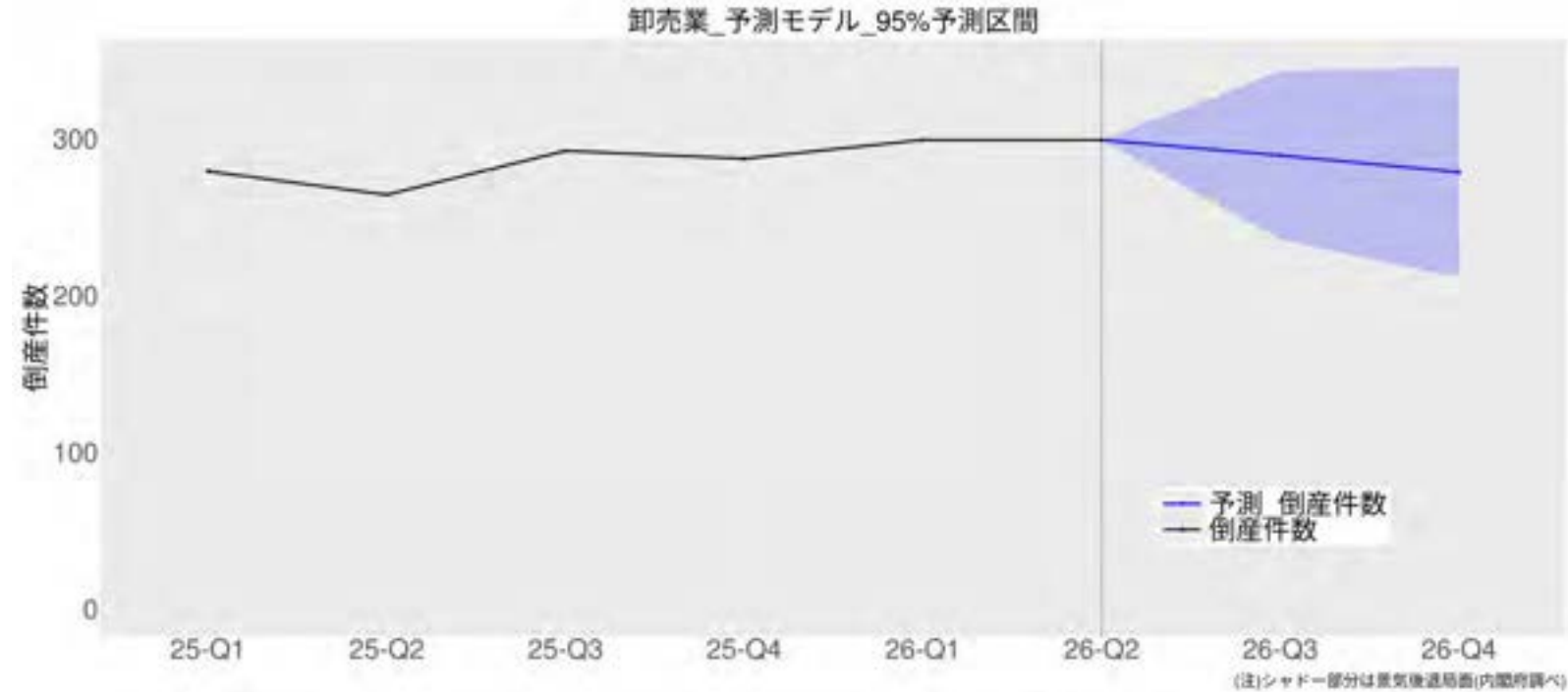
【サービス業】 1期先予測モデルの要因分解



- 予測値への寄与には**短期借入金合計金**など資金繰りに関する指標が強く反映されており、足元の資金繰りや短期的な資金調達環境が反映されていることが示唆される
- 中小企業では短期借入の減少が倒産件数を押し上げる方向に寄与し、併せて単価PC3（部品関連を表現）が設備・IT機器等の導入コストの増加を反映し、倒産件数を押し上げる方向に寄与していることが示唆される

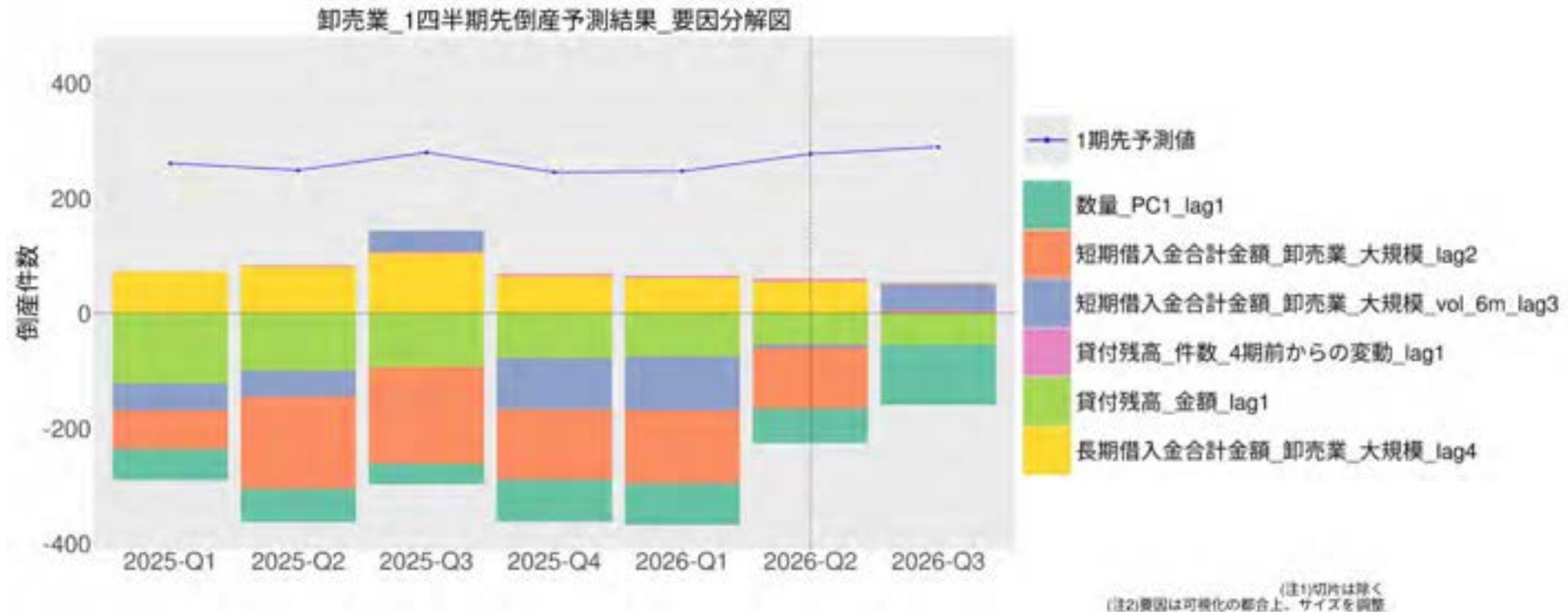
【卸売業】倒産件数の予測結果

- 今後2四半期は、**緩やかな減少傾向で推移する**と予測される
- 2026年Q3/Q4ともに直近実績を下回る水準となる見込みである



	25-Q3実績	25-Q4実績	26-Q1実績	26-Q2実績	26-Q3予測	26-Q4予測
予測区間上限	—	—	—	—	342.68	345.72
実績・予測	292	287	299	299	289.08	278.41
予測区間下限	—	—	—	—	235.48	211.10

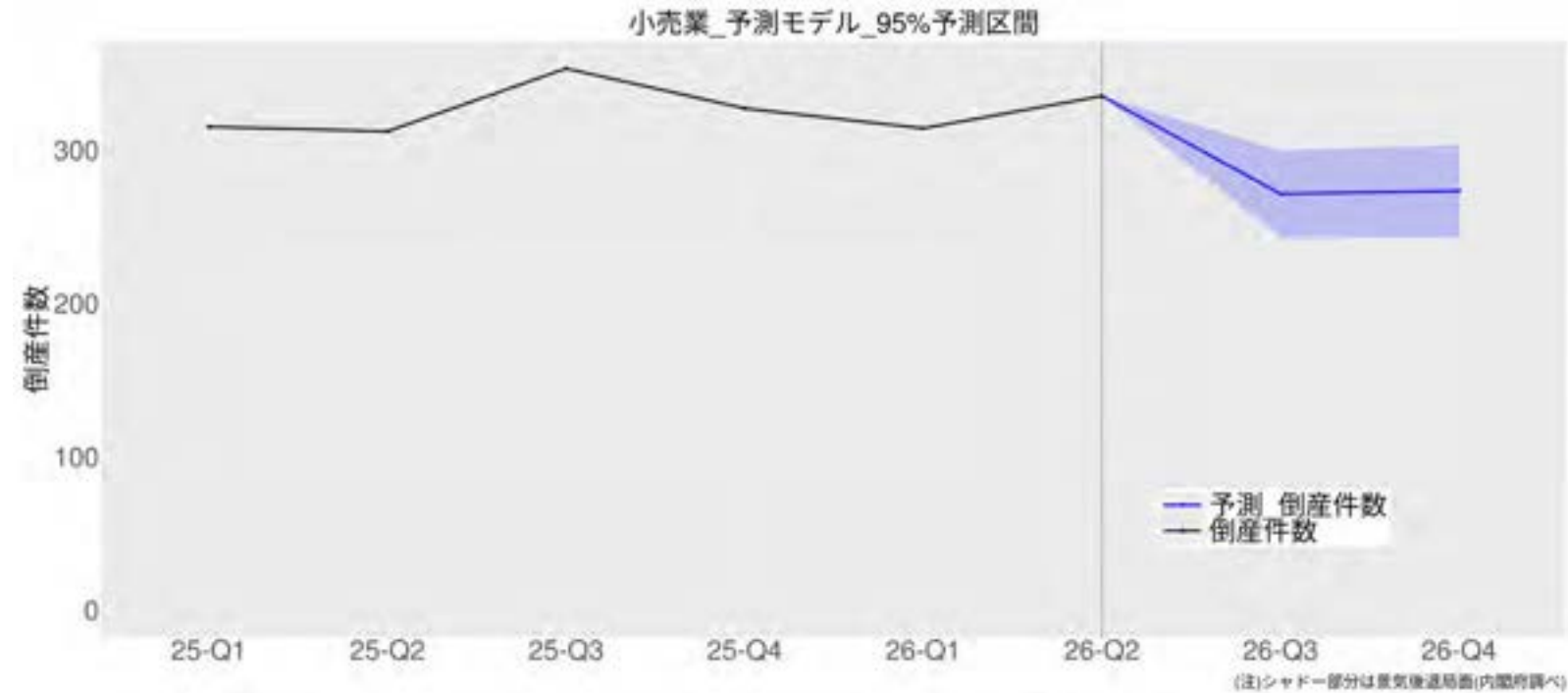
【卸売業】 1期先予測モデルの要因分解



- 卸売業においても、予測値への寄与には**短期借入金合計金**に関連する指標が強く反映されており、仕入れから販売までの運転資金を必要とする卸売業の特徴が、短期借入関連指標の採用に反映されていることが示唆される
- 数量PC1（全体的な変動を表現）では、IC、自動車部品等の輸入数量の動きが倒産件数を押し下げる方向に働き、短期借入の増加は、仕入れ・在庫保有に伴う資金需要の強まりを反映していると考えられる

【小売業】 倒産件数の予測結果

- 今後2四半期は**短期的な減少の後、低い水準にとどまる**と予測される
- 2026年Q3に大きく低下し、 2026年Q4もほぼ同程度の水準が続く見込みである



	25-Q3実績	25-Q4実績	26-Q1実績	26-Q2実績	26-Q3予測	26-Q4予測
予測区間上限	—	—	—	—	299.65	303.19
実績・予測	353	327	314	335	271.27	273.19
予測区間下限	—	—	—	—	242.89	243.18

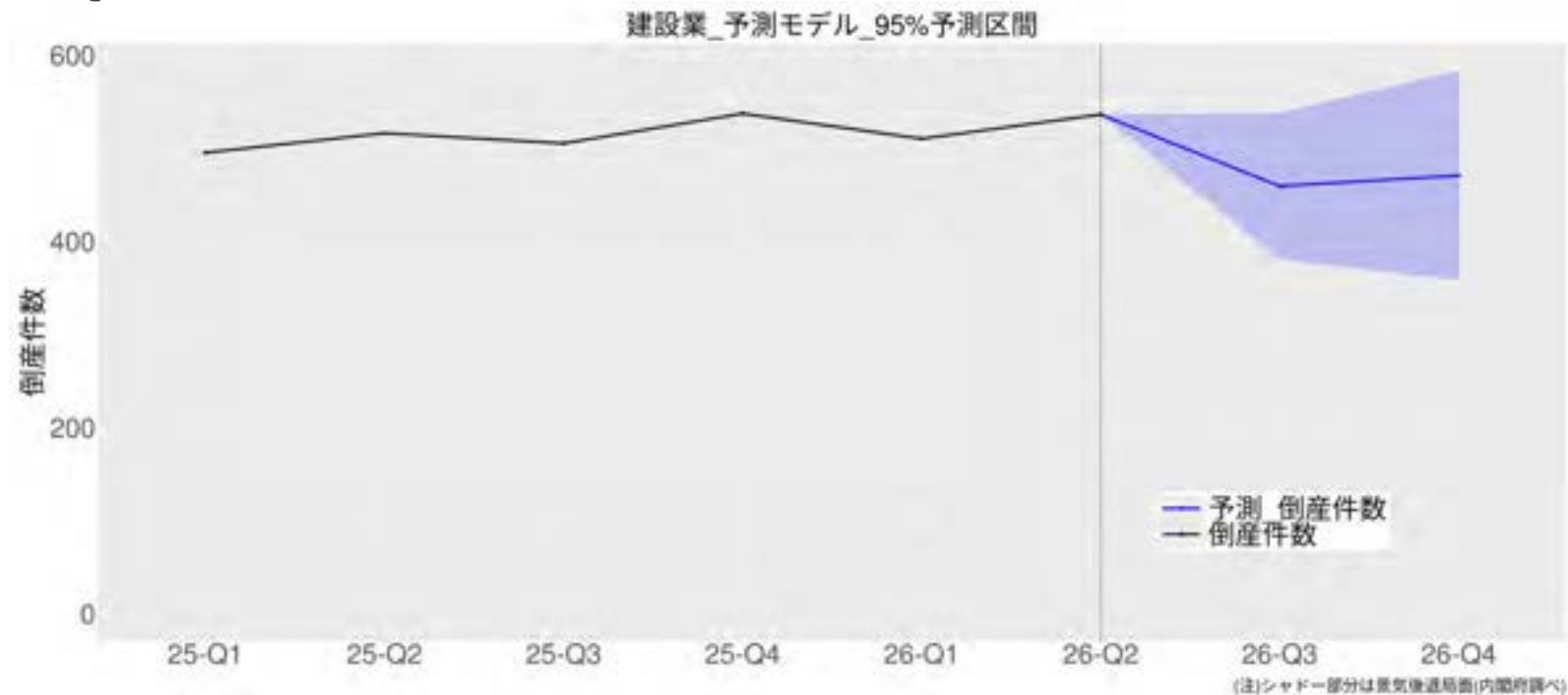
【小売業】 1期先予測モデルの要因分解



- **長期借入金合計金額**や**中小企業の生産設備**が予測値の変動に強く反映されており、店舗・設備への投資や中長期的な資金調達の影響を受ける小売業の特徴が、採用変数に反映されていることが示唆される
- 短観_生産設備と長期借入金より、設備の過剰感が弱まるとともに長期借入金も減少していることが倒産件数を押し下げる方向に寄与していると考えられる

【建設業】倒産件数の予測結果

- 今後2四半期は**短期的な減少の後、低い水準にとどまる**と予測される
- しかし、2026年Q4でも直近の実績と比べると低い水準にとどまる見込み



	25-Q3実績	25-Q4実績	26-Q1実績	26-Q2実績	26-Q3予測	26-Q4予測
予測区間上限	—	—	—	—	537.86	583.10
実績・予測	505	537	510	536	459.09	470.45
予測区間下限	—	—	—	—	380.33	357.79

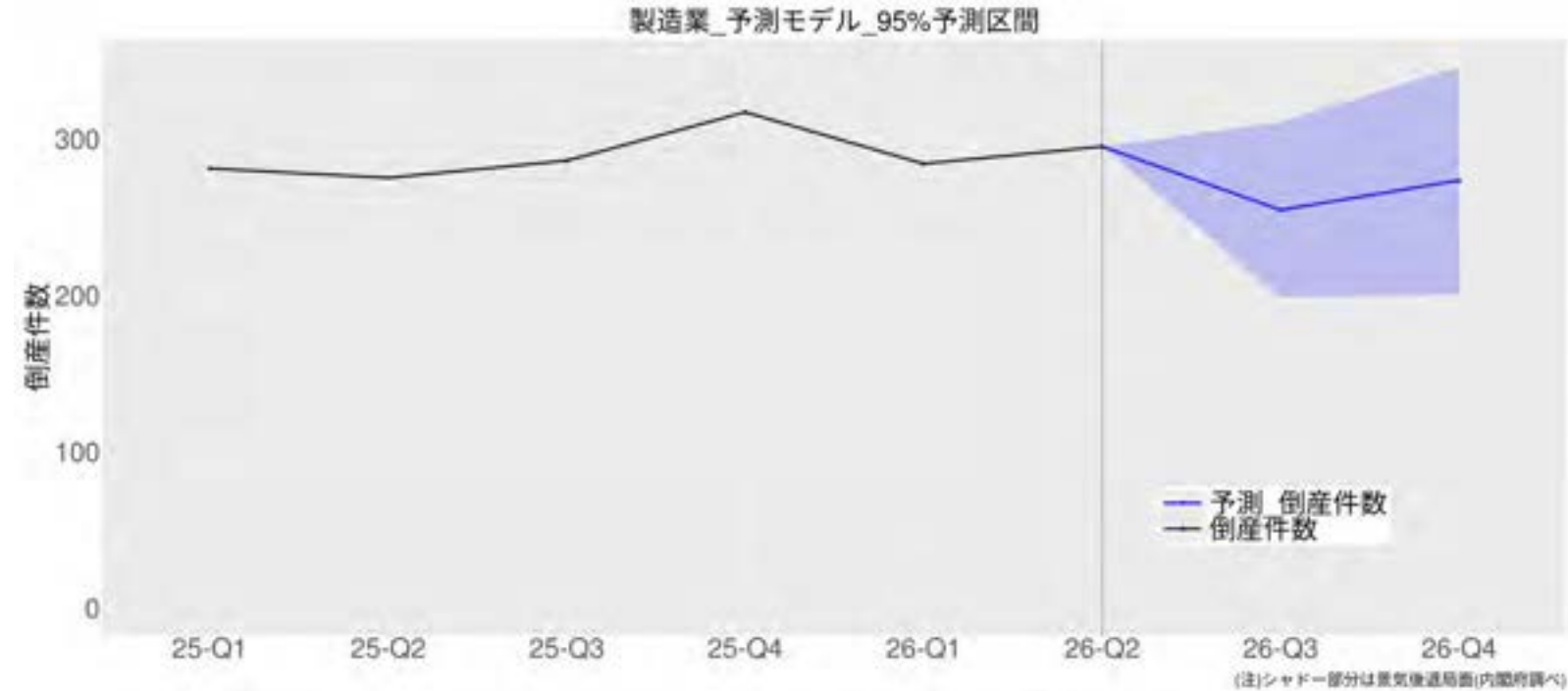
【建設業】 1期先予測モデルの要因分解



- **長期借入金の変動性**や**中小企業の生産設備**が予測値の変動に強く反映されており、設備保有や工事資金など中長期の資金需要が大きい建設業の特徴が、借入・設備関連指標の採用に反映されていることが示唆される
- 生産設備関連の指標から、設備不足感の緩和が倒産件数を押し下げるが、正社員数の増加は人件費などの固定費負担を通じて、倒産件数を押し上げる方向に寄与していることが考えられる

【製造業】倒産件数の予測結果

- 今後2四半期は**短期的に減少した後、現在の水準に向けて持ち直す**と予測される
- しかし、2026年Q4でも直近の実績と比べると少し低い水準にとどまる見込み



	25-Q3実績	25-Q4実績	26-Q1実績	26-Q2実績	26-Q3予測	26-Q4予測
予測区間上限	—	—	—	—	310.53	346.18
実績・予測	286	317	284	295	254.45	273.35
予測区間下限	—	—	—	—	198.36	200.52

【製造業】 1期先予測モデルの要因分解



- **非正規社員数**や**数量PC1**（全体的な変動を表現）など、**雇用・貿易に関する指標**が予測値の変動に大きく寄与しており、労働力確保や原材料・輸入価格の影響を受けやすい製造業の特徴が、雇用・貿易関連指標の採用に反映されていることが示唆される
- AI・半導体、自動車関連の需要拡大を背景に、輸入数量は製造活動を下支えする一方、非正規社員数の減少が倒産件数を押し上げていると考えられる

まとめ

- 予測結果

- ー サービス業・建設業では、**コロナ禍以前を上回る水準**まで倒産件数が増加している
- ー 卸売業・小売業・製造業では、**コロナ禍以前と同程度の水準**で推移している
- ー 先行きの動きには業種差がみられ、サービス業・建設業・製造業は**横ばい傾向**、小売業・卸売業は**減少傾向**である

- 採用されたモデルの変数

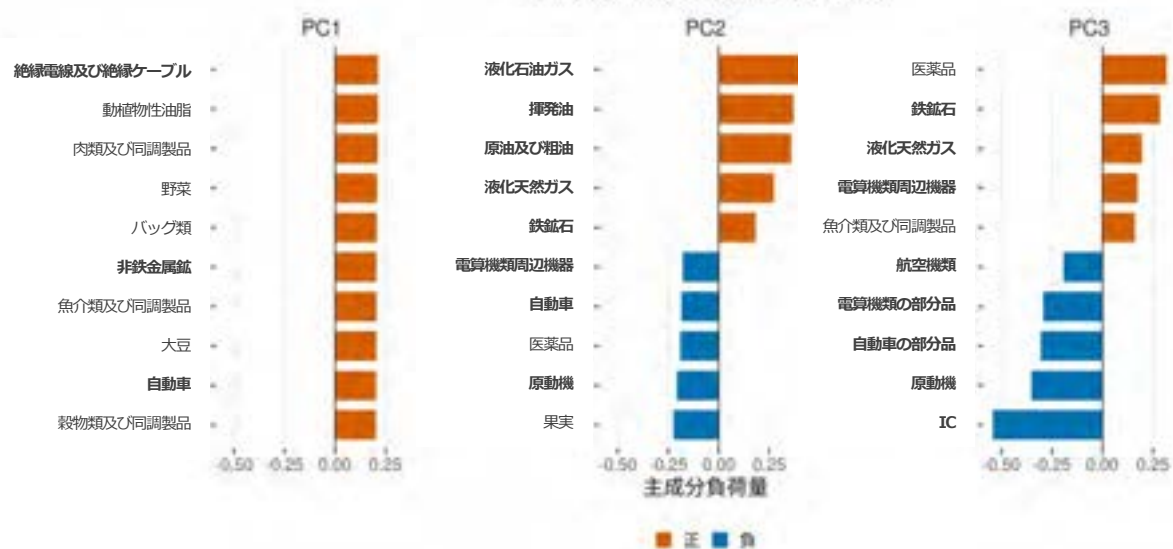
- ー 複数の業種で、**貸出・借入などの資金調達関連指標**が予測値に強く反映されている
- ー **雇用、生産設備、輸入数量・単価**など、各業種の事業環境を反映した指標にも各業種ごとの特徴がみられる
- ー 今後は、**資金調達環境**に加え、**雇用・設備・貿易環境の変化**を業種別に継続して確認する必要がある

Appendix

[参考] 貿易統計の主成分分析の概要^[1] ^[2]

- 輸入品目貿易統計のPCが複数業種の予測モデルで採用されており、特に**石油・原料・機械・電子部品**などの輸入数量・単価の変化が、業種別倒産件数の変動と関連している状況がみられる
- 特に**数量PC1・PC3、単価PC3**などの輸入動向を反映する主成分が複数業種の予測モデルで採用されており、海外からの輸入環境の変化が倒産件数の予測に寄与していることが示唆される

単価の主成分負荷量上位10変数



数量の主成分負荷量上位10変数



単価指標におけるPC1～PC3の主成分負荷量(上位10指標)

数量指標におけるPC1～PC3の主成分負荷量(上位10指標)

[1] 詳細は倒産件数予測（モデル概要）P15「[参考3-1] 貿易統計の主成分分析」,P16「[参考3-2] 貿易統計の主成分の解釈」に記載

[2] フォワードテストを実施するため、フォワードテスト前までの期間を学習データとして使用